# 宮古島市内の戦車壕に関する考察

久貝弥嗣・山口直美・森谷大介・菱木勇一・川満広紀

## はじめに

宮古島市教育委員会では、平成29(2017)年度に宮古島市内の城辺、上野地区を対象とした戦争遺跡の分布調査を実施した。本調査では、各地区の体験談(城辺町教育委員会 1996、上野村教育委員会 2003)や聞き取り調査、これまでの戦争遺跡の報告事例(宮古郷土史研究会1995、沖縄県立埋蔵文化財センター2005)を参考としながら現地調査を行った。この調査において、戦車壕と呼ばれる壕に関する情報が複数得られた。戦車壕の呼称については、大規模な壕の名称として使用される場合もあることから、実際の戦車との関係性については不透明な部分も多いと感じられたが、実際の現地調査をとおして、その形態に共通性が認められる壕が複数確認された。

戦争遺跡については、壕の存在は確認できるものの、その用途や機能、歴史背景について特定することが非常に難しいという課題を有している。それは、軍が使用していたために明確な使用の実態についてたどることが難しいことや、戦後72年を経てこれらの関係者に現地で確認をすることが難しいことなどが要因といえる。本論では、これまでの分布調査で確認された戦車壕とよばれる壕の形態的特徴について整理を行っていきたい。

## １．太平洋戦争時における宮古島に配備された戦車

太平洋戦争時に宮古島市内に戦車が配備されたことは、戦史資料から確認することができる(JACAR〔アジア歴史資料センター〕Ref. C12122494800　15.沖縄方面部隊(1)、JACAR〔アジア歴史資料センター〕Ref. C11110011100　戦車第27連隊)。以下にこの戦車第27連隊第3中隊の概要についてまとめる。

戦車第27連隊第3中隊は、昭和19年7月16日、宮古島に上陸している。同戦車隊の編成は、渡辺晃米大尉を中隊長に、指揮班、小隊（1～3)、整備班、配属班、属修理小隊、配属軍医、衛生下士官、主計、主計下士官の計114名からなり、装備は指揮班が中戦車2台、軽戦車1台、第1・2・3小隊はそれぞれ中戦車3台、配属修理小隊は貨車4台を有したとある。そして、同戦隊は、主力をウヅラ嶺の集積所に、一部を福里待機位置近傍に集積して、輸送は全て自隊所有の貨車を以て移動したとある。本戦史資料には、戦車の種類までは記録されていないが、『先島群島作戦』(瀬名波 1975)によれば、装備は97式中戦車（13トン、57ミ

リ砲1門、機関銃3丁）10台と95式軽戦車（重量5トン、37ミリ戦車砲1門と機関銃1丁）1台から成るとある。このことから、戦車第27連隊第3中隊が有していた戦車は、97式中戦車と95式軽戦車であったことが分かるが、その数量については戦史資料が97式中戦車が11台であるのに対し、『先島群島作戦』では10台と1台分の差がみられる。

次に、体験談や聞き取り調査で得られた戦車壕に関する情報について整理を行う。城辺小学校沿革誌によると、『昭和19年7月19日　本日より戦車隊〇〇名本校に駐屯校舎7教室提供　昭和19年9月14日、当校駐屯の戦車隊、当校より西部および南部へ移動。当校舎には八〇〇旅団司令部設置。校舎大部分採用される（但し職員室除く）』[注1]とあることから、戦車第27連隊第3中隊は宮古島上陸直後に、城辺小学校に駐屯したと考えられる。その他、城辺町史第二巻戦争体験談編では、戦車隊は高阿良後の前ンミャーマガーに天幕を張り、炊事に井戸を利用していたとある。また、歩兵第30連隊に現地入隊し福南の高阿良後で実際の戦車で訓練したとの証言もある。これらの学校沿革誌や体験談、聞き取り調査の情報から、城辺の福里地域に一時期戦車第27連隊第3中隊が展開していた状況がみてとれる。

下地の嘉手苅においても、戦車が1台秘匿されていたとの聞き取り調査の証言がえられている。『先島群島作戦』では、飛行場復旧作業にはブルトーザー代わりに戦車が使用され、威力を発揮したが、本来の目的に副わない戦車使用方法は中隊長以下歓迎されなかったとされている。下地嘉手苅の秘匿場所は、中飛行場の掩体にも近接していることから、『先島群島作戦』にみられるようなブルドーザーとしての利用も推察できる証言といえる。

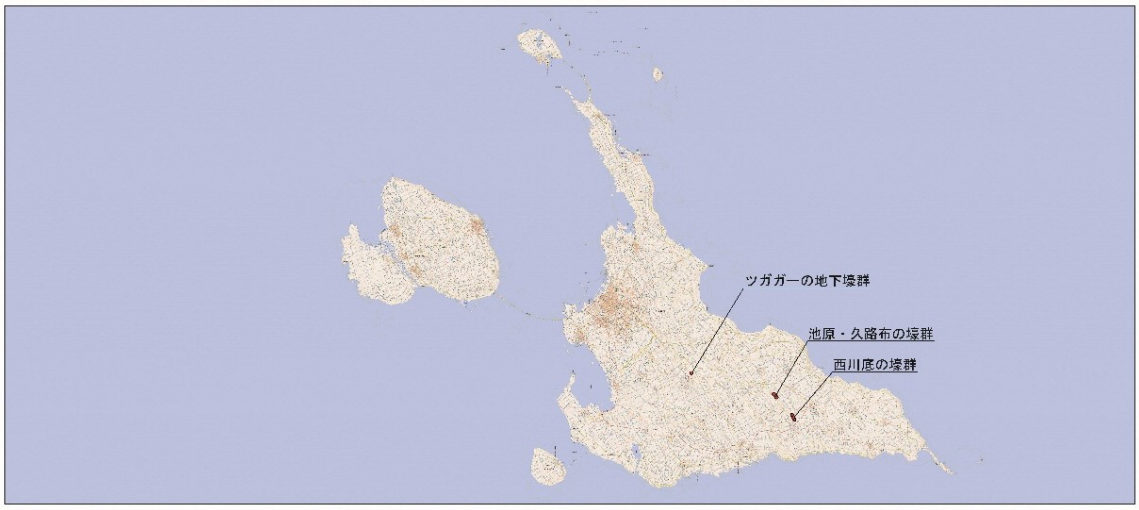
## ２．戦車壕の概要

城辺、上野地区の戦争遺跡の分布調査を行っていく中で、戦車壕と考えられる戦争遺跡として、池原・久路布の壕群、西川底の壕群、ツガガーの地下壕群の3遺跡がある。ツガガーの地下壕群は、沖縄県立埋蔵文化財センターによって詳細な調査が行われており、池原・久路布の壕群、西川底の壕群は今回の分布調査で新規に確認された壕である。以下、各遺跡の概要について記す。

### (1) 池原・久路布の壕群（写真1～3・第2図）

本壕群は、城辺字比嘉の小字池原と久路布にまたがる丘陵の東側に位置し、合計3基の壕が確認された。壕の前方はキビ畑になっており、戦後の圃場工事の為か、岩盤が削り取られている。その為、入口付近の畑からは 1.8mの段差ができているが、アクセスについては比較的容易である。北側から壕①、②、③とした。

**壕①**　琉球石灰岩を掘り込んで作られており、残りは比較的良い状態である。約 6mの羨道[注2]が作られている。壕口は北東を向いており、壕口の大きさは、幅 3.5m、高さ 2.9mと広い。壕口から奥に向かってほぼ直線で約13.5m進んで止まっており、壕口付近の北壁に幅




第１図　戦車壕関連の戦争遺跡位置図

写真１　池原・久路布の壕（壕③）

写真２　池原・久路布の壕（壕①）

50 ㎝、奥行 1mの小部屋が作られている。壕内部には幅が 40 ㎝の溝が、壕の縦軸と並行に 2 本並び、2 本の溝の間は 120 ㎝である。この 2 本の溝については､97 式中戦車のキャタピラー幅と一致することかから(第 2 図)、本壕が戦車を格納していた可能性は非常に高い。

写真３　池原・久路布の壕（壕①の内部）

**壕②**　琉球石灰岩を掘り込んで作られており、構築途中で中止した状態なのか残りは悪い。約 8.5mの羨道が作られている。壕口は北東を向いており、幅 3.5m、高さ 2.2mと広い。壕口から奥に向かって直線で約 8m進み止まっている。右奥に北西方向に通路が掘られているが、約 4m進んで止まっている。

**壕③**　琉球石灰を掘り込んで作られている。壕口付近が、崩落による岩盤でほぼ塞がっている。中は幅 2.5m、高さ 2.7mと広い作りをしており、壕口から奥に向かって直線で約 7m進んで止まっている。壕口付近の崩落により土砂の流入が内部の半分を占めている為、残りは非常に悪い。

**(2) 西川底の壕群**（写真 4・5・第 2 図）

西川底の壕群は城辺福里西川底に位置し、丘陵の東側の麓に壕が構築されている。本遺跡は、全体で 5 つの壕から構成される。その内、戦車壕と考えられる壕は、3 つである。3 つの壕は約 30～40m 間隔で並行に並んでおり、1 つの壕は構築途中である。また、他の 2 つの壕も、壁面や床面の構築状況が粗く、構築途中であった可能性が考えられる。しかし、3 つの壕はいずれも羨道を有する直線的な形態を呈する点は、ツガガーの地下壕群や池原・久路布の壕群と共通する。また、構築途中の壕以外については、いずれも脇部屋が設けられている。壕の最奥の側面部につくられるものや、最奥からやや上がった位置に設けるなどの脇部屋の位置に違いはみられるが、共通した要素とみることができる。

これらの 3 つの戦車壕をはさむように北と南に 1 つずつ別の 2 つの壕が確認されている。いずれも壕口の幅は 2m以上と広い形態をしており、内 1 つは、壕内から丘陵上部へぬける通路も設けられている。また、もう 1 つはゴミの流入により入口がほぼ埋まっている状態であるが、内部は広く残りは良い。以下、戦車壕と考えられる 3 つの壕の概要について記す。なお、戦車壕と考えられる壕について南側から壕②、③、④とした。[注3]

**壕③**　琉球石灰岩を掘り込んで作られている。羨道が 17mほど続いており、壕口が北東方向に幅 3m、高さ 3mの逆U字型の形で開いている。内部は壕口から直線で約 14m進んで止まっており、左右の壁面には奥行 1.6m程の脇部屋が作られている。左奥には北西方向に通路が 8.5m伸びており、幅 2.5m、高さ 2.3mの脇部屋が作られる。

**壕②**　壕②は、羨道のみが構築され壕内部については掘削の行われていない構築途中の壕で

**写真 4　西川底の壕群（壕③）**

**写真 5 西川底の壕群（壕④）**

ある。羨道部分の幅は3.3m、長さ5.1mである。壕口は東北東を向く。

**壕④**　壕④は、羨道の部分の幅が約 3.4mあるが、壕口近くにはコンクリートで固められた石積があり、その部分が通路側にせり出している。この石積のある最も羨道の幅がせばまる部分は幅約3.1mである。羨道の長さは約8.5mを有し、北北東を向く。壕④については、羨道部分と壕内部が直線ではなく30度ほど曲がった形状をなす。そのため、壕口部分は北東方向を軸とする。壕内の幅は約3.3mで長さは15.8mである。最奥の突き当り部分には、約1.8m上がった部分に約 1.2mの通路が構築され、90 度折れ曲がった先に、幅 1.6m、長さ 7.2m、高さ 1.4mの脇部屋が設けられている。壕内の天井部分は崩落も多いが、やや丸みをもった略方形状の断面形を呈する。

**(3) ツガガーの地下壕群**(写真6・第2図)

ツガガーの地下壕群は、野原岳の東側の丘陵下部に位置し、宮古島市指定文化財ツガガーの周辺部に 15 の壕が確認されており(沖縄県立埋蔵文化財センター2005)、⑮～⑰の 3 つの壕が戦車壕と考えられている。3つの壕は、全て東北東へ壕口が開口し、壕⑰と壕⑯の間は約34m、壕⑯と壕⑮の間は約 30mとほぼ等間隔で並行に壕が位置している。同報告によると、本遺跡については、戦車壕としての情報が得られており、今回の分布調査においても、戦車に関連する聞き取り調査の情報が得られた。以下、各壕の形態について概略する。

**写真6　ツガガーの地下壕群**

壕⑰　琉球石灰岩を掘り込んで作られており、羨道は11.5mを有する。壕口は東を向き、幅3.3m、高さ 3.0m、奥行は直線で約 7mまでは進めるが、奥には上方に向かう幅 2mの斜坑があり土砂の流入で埋没している。壕内部は天井の崩落がみられ、床面は凹凸感がある。壕の奥の方には〝ヒメノ〟と黄色い塗料で記されている。

壕⑯　羨道は7.2m、壕口は東側を向き、幅3.2m、高さ2.8m、奥行き8.5mで壕⑰と同形状である。西側の突き当りの壁は壕⑰と同様に流入した土砂で埋没しており、地上への出入り口の可能性がある。突き当り南側には通路状に掘り込んだ壕が伸びており、途中で粘土質に変わる。そのため、通路部分には水がたまっており、壕口は土砂で埋没している。天井部分の崩落は少なく、床面はフラットである。本壕の壕口部分には、黄色の塗料で〝1SA〟と〝ヒメノタイ〟と書かれている。

壕⑮　羨道は9m、壕口は幅3.5m、高さ2.4m、奥行き10.７mで、前述の壕⑰壕⑯と同様の形状をしている。壕口は少し崩落が見られるが、壕内の天井部分の崩落は少なく、床面は土肌になっている。奥の壁は土砂が流入した形跡はなく、構築時の奥行きの原型を留めていると考えられる。

ここで壕⑰と壕⑯に記された〝ヒメノ〟と〝1SA〟について考えてみたい。戦車第27連隊第3中隊の戦史資料や『先島群島作戦』などを見る限り、ヒメノという隊員に関する情報は得られなかった。その一方で、野戦重砲兵第1連隊第1大隊には、指揮班長、姫野寛一中尉の名前が見て取れる。また、SAは野戦重砲兵の略記号でもあり、1SAは野戦重砲兵第1連隊もしくは第1大隊を示す略記号であると考えられる。黄色い塗料で文字が書かれた経緯としては､戦後に関係者がその壕の構築もしくは使用を記録する目的で行ったことが推察される。これらの点を考慮するならば、本遺跡の戦車壕については、野戦重砲兵の所有していた榴弾砲を格納していた可能性も考えられる。推測の域を出ないが、戦車壕と榴弾砲の格納が時期差をもって使用されていた可能性が残る。

## ３．戦車壕に関する考察

本論では、戦争遺跡の種類の一つとして戦車壕がどのようなものであるのか、宮古島市内の事例から考察を行うことを目的としてきた。戦争遺跡において、壕の形態などから機能を特定することは非常に難しい。今回報告を行った3つの戦車壕と考えられる戦争遺跡と形態が類似する壕の種類として、特攻艇秘匿壕群や野戦重火器秘匿壕群がみてとれた。いずれの壕も戦車､特攻艇､野戦重火器といった大型の兵器を格納する目的で構築されたものである。そこで、今回報告を行った3つの戦争遺跡の事例から、戦車壕と考える6つの要素について整理を行う。

①壕の規格について、概ね壕口の幅は3m～4mと幅広く、高さは2.5m～3mを呈する。長さについては7m～15mほどである。

②内陸部の丘陵下に立地する。

③壕口から直線につづく石灰岩を方形に掘り込んだ羨道を有する。羨道の長さは 6～17mで、壕口と同じ幅で直線的な形状をなす。

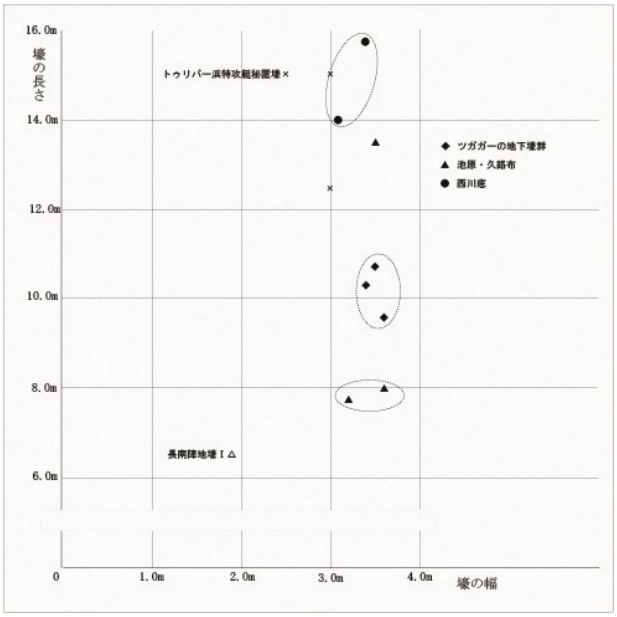
④壕の断面形態は方形を呈し､方形の隅は明確に角をもち､天井部分は水平をなす。また、壕口からほぼ同じ幅で直線的な構造をなす。

⑤戦車壕と考えられる壕は単体で構築されるのではなく、複数の壕を並行に構築して一つの単位を形成している。

⑥戦史資料、体験談、聞き取り調査などから戦車に関する情報を有する。

すべての戦車壕に見られるわけではないが、西川底の壕群や、ツガガーの地下壕群には、直線的な壕に付随して地表部へ向かう通路状の壕口も有しているものが複数みられる。また、壕内に柱と梁を設置していたと考えられる痕跡も複数みられるが、これらの痕跡に特徴的な傾向を見出すことはできなかった。

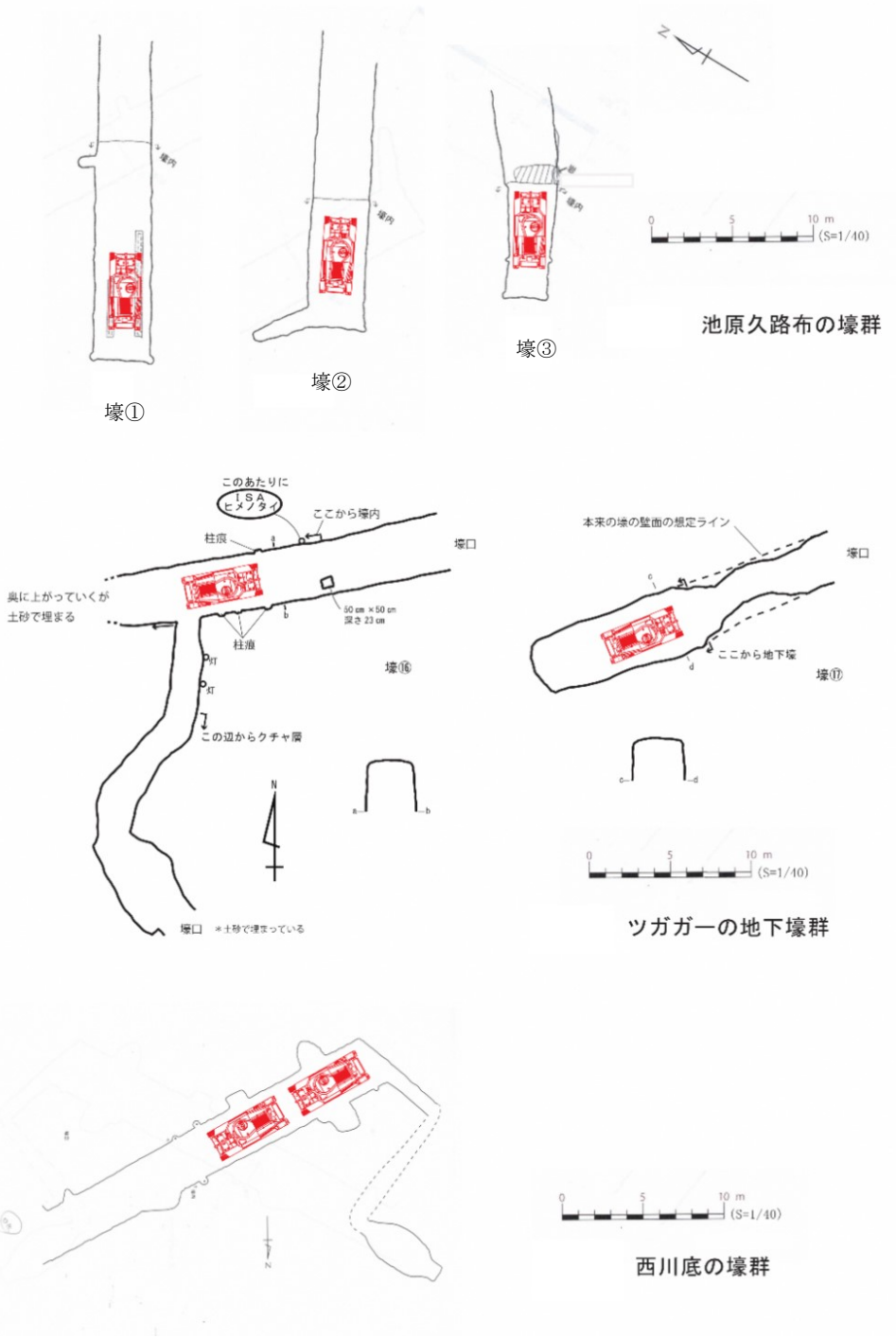
次に、前述した 6 つの特徴をもとに、戦車壕とその他の壕との比較検討を行っていきたい。まず、戦車壕と考えられる 3 つに戦争遺跡の規模について幅、長さの傾向を示した(第 1 図)。戦車壕の規格を考える際には、当然ながらその壕に格納される戦車の規格が明らかであることが必要である。宮古島市内には、前述したように 97 式中戦車と 95 式軽戦車を格納するということが前提条件にある。第1図にも見られるように、戦車壕とされる壕については、壕口の幅が 3m以上を有することは大きな特徴であり、2 種の戦車を格納できる十分な幅である。また、概ね、各遺跡ごとに、一定の共通した規格性をみてとれる。




**第 1 図　戦車壕の幅と長さの相関図**

特攻艇秘匿壕については、各戦争遺跡によってその幅と長さには差異がみられ、大浜の特攻艇秘匿壕群は、壕口の幅が 2.5mほどと比較的狭いのに対し、トゥリバー浜の特攻艇秘匿壕群、荷川取ウプドゥマーリャ特攻艇秘匿壕群(宮古島市教育委員会 2017a)、ヌーザランミ特攻艇秘匿壕群はいずれも壕口の幅が 3m以上を有する壕である。単純な壕の規格で比較を行うならば、特攻艇秘匿壕群との差異はそれほどみられない。また、特攻艇秘匿壕も、複数の壕を一定の間隔で並行に構築するため、⑤の特徴と類似する点もみられる。しかし、特攻艇秘匿壕は特攻艇を出撃させる目的から海岸近くに構築される立地にあり、③に見られるような羨道も見られない。また、壕の断面形態としては、戦車壕にみられるような角をもった方形の断面形態ではなく、緩やかな円形を有する形態を呈するという点で差異がみられる。

次に野戦重火器秘匿壕群との比較を行ってみたい。野戦重火器秘匿壕の中で榴弾砲を秘匿していた壕として下里添の野戦重火器秘匿壕群、牧山陣地壕、パナタガー嶺の野戦重火器秘匿壕、国仲砂川の壕(宮古島市教育委員会 2017b)がみられ、体験談や戦史資料などの点から 96 式 15 糎榴弾砲を格納していたとされる。これらの戦争遺跡の壕については、それぞれ壕




第 2 図　各遺跡の壕の平面図・断面図及び 97 式中戦車格納想定図

口部分に特徴的な構造がみられ、下里添の野戦重火器秘匿壕群については、三角フラスコ状の形態を呈し、国仲砂川の壕については方形に広い壕口を有している。野戦重火器秘匿壕についても、その機能が特定されている壕自体が非常に少ないこともあるが、いずれも壕口の形態が他の壕とは異なる形態を有している。しかし、下里添の野戦重火器秘匿壕については、同様の形態の 3 基の壕が一定の間隔で並列している状況は⑤の特徴と類似する部分もみられる。また、特徴的な壕口以下は、3 つの戦車壕と同様に壕口が 3m以上の直線的な構造をなしている。ツガガーの地下壕群の黄色の塗料の文字にも見られるように、榴弾砲などの重火器の格納についても十分な機能を有することができることから、聞き取り調査や体験談などの記録も含めて総合的に検討を行う必要性がある。

その他、現在宮古島市内で確認されている戦争遺跡の中で直線的な形態をもつ壕として、西高阿良後の壕、長南陣地壕の壕と比較を行った場合、前述した①～⑥の特徴を有する壕は西川底の壕群、池原・久路布の壕、ツガガーの地下壕群の 3 遺跡のみであった。⑥の壕が複数並列する状況は、1 小隊あたり 3 台の戦車を保有していたことと関連性があると考えられるが、今後単体で確認される場合の事例についても留意する必要がある。その他、地域によってその構築方法に差異がみられることも考慮しなければならないが、概ね前述した①～⑥の特徴を有する壕については戦車壕としての機能を想定していくことができると考える。

## 最後に

前述してきたように、戦争遺跡の用途を壕の形態のみから判断を行うことは非常に難しい。沖縄県内の戦争遺跡の種類については、沖縄県立埋蔵文化財センターによってその定義が示されている（沖縄県立埋蔵文化財センター2016）。筆者らも、宮古島市内における戦争遺跡の調査を通して、戦争遺跡の形態からある程度の基準を作り上げていくことができる可能性を感じた。今回は戦車壕について整理を行ったが、今後は榴弾砲秘匿壕群をはじめとした重火器の秘匿壕群や、海岸線に分布する銃眼などについても整理をおこなっていきたい。また、島外地域の戦争遺跡との比較を行いながらそのバリエーションに関しても考察を深めていきたい。

注 1：八〇〇旅団司令部は、独立混成第 60 旅団司令部を示す。

注 2：石灰岩を└┘の形態に掘り込んで通路に構築した部分を羨道と称した。

注 3：壕②よりも南にある壕を壕①、壕④よりも北にある壕を壕⑤としている。

謝辞

本論の作成にあたり、沖縄県立博物館・美術館の山本正昭氏から壕の形態の比較方法などについてご教示いただいた。記して感謝申し上げます。

＜参考文献＞

・上野村教育委員会 2003 年 『村民の戦時・戦後体験記録集』
・沖縄県立埋蔵文化財センター 2005 年 『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査（Ⅴ）-宮古諸島編-』
・沖縄県立埋蔵文化財センター 2016 年 『戦争遺跡詳細分布調査』
・城辺町役場 1996 年 『城辺町史』第 2 巻戦争体験編
・宮古郷土史研究会 1995 年 『宮古の戦争』麻姑山書房
・宮古島市教育委員会 2017 年 a 『荷川取崎名原の古墓・荷川取海岸秘匿壕群・ウプドゥマーリャ特攻艇秘匿壕群』宮古島市文化財調査報告書第 12 集
・宮古島市教育委員会 2017 年 b 『国仲砂川の壕』
・瀬名波栄 1975 年 『先島群島作戦』先島戦記刊行会